

実践報告

## 2015年度兵庫医療大学全学FD／SD 「主体性を育むには」

—第1学年次看護学生の態度教育における一考察—

萩野待子

兵庫医療大学看護学部

### 抄 録

2015年度FD／SDでは、主体性を育むにはというテーマで、日々の実践を内省する機会を得た。1年次は、看護学を探究する姿勢の基盤を学ぶ時期であり、看護学導入期に特徴的な「看護学生に必要な身だしなみ」と「基礎看護技術修得に必要な学ぶ姿勢」の事例を取り上げ、教員と学生の具体的なやり取りを示した。

事例を振り返り、主体性を育むためには、教員の価値・先入観を挟まずに、学生に興味と関心を示し謙虚に問いかけること、学生と目標を一致させるために、学生が生きている世界を知ること、看護の対象者や協働者の存在を意識し主体性を発揮できるようにかかわることが重要であると意味づけた。

本稿は2015年FD／SDワークショップ発表時の内容に、事例の詳細と考察を加えて報告する。

キーワード：主体性、FD、教育実践事例、態度教育、看護学生

### I はじめに

本学は、開学以来チーム医療により社会の多様なニーズに対応できる医療専門職者の育成に力を注いでいる。チーム医療においては、医療専門職が主体性を持ち、それぞれの専門性を活かして対象者の問題解決に当たることが求められる。主体性は、「自分の意志・判断によって、自ら責任をもって行動する態度や性質」<sup>1)</sup>であり、大学においては、生涯にわたり学び続け、主体的に考える力を育成することが課題である。そのため、大学教員には、学生の主体的な学習を支えるための教育方法の実践や教育能力の向上が要請されている<sup>2)</sup>。

このような社会的要請を踏まえ、2015年度には、「学生の主体性を育むには」というテーマで全学FD／SDを実施した。その中で日々の教育を振り返り、看護学部1年生に焦点をあてた実践を報告した。

第1学年次の専門科目は基盤看護学領域が担っており、看護学の理論、看護専門職の役割・責任と機能、

看護の対象となる人々の理解、基礎看護技術及び看護者に必要な態度の修得を目指している。学生に、「どのような看護者になりたいですか」と問うと、「優しい看護師」、「患者の精神的サポートができる看護師」、「辛い気持ちに寄り添える看護師」など、理想とする看護者像を語り始める。入学直後から始まる専門科目の学習を通して、理想の職業に就いていくために学んでいるという実感を持ち始める。職業への意識が高いこの時期に、看護者が身につけるべき基本的態度の育成を強化することは、自己像と職業を同一化させていく職業的アイデンティティ獲得にとって大変重要な意味をもつ。

本報告では、看護学導入時期の「看護学生に必要な身だしなみ」と「基礎看護技術修得に必要な学ぶ姿勢」に関する事例を取り上げ、教員と学生の具体的なやり取りを紹介する。

## Ⅱ 教育の概要

### 1. 身だしなみを整える

4月開講の基礎看護方法論において、学生は看護者が患者に影響を及ぼす環境要因であること学び、看護者に必要な身だしなみを考える。看護学生が目指す姿として身だしなみチェック表(表1)を明示し、学生が自らチェックの上演習に臨むよう促す。適切な身だしなみ修得に向けて、①指示通り整えてみる、②身だしなみチェック表を意識しセルフチェックにより整える、③仲間でお互いに注意し合い適切に整えるという3段階設定し、約1か月かけて修得を目指す。しかし、例年、少数ではあるが身だしなみを整えられない学生がいる。その理由は多様だが、姿勢・態度は、しつけや強制ではなく、学生自身が専門職に求められる姿勢・態度の一つとして、必要性や意味を感じて主体的に実践していかなければ修得できないとすると、身だしなみの必要性を自分なりに理解することができていないことが多いと推察する。よって、教員は、看護者に必要な姿勢・態度と現在の自分を照らし合わせて考えられるように関わるのが必須となる。

### 2. 基礎看護技術を修得する

基礎看護技術を教授する科目は、基礎看護方法論(1単位)、基礎看護技術Ⅰ(2単位)の計2科目がある。看護技術修得は、講義・演習時間内で達成されるものでなく、時間外の自己練習も必要である。そのため、基礎看護学では、平日7:30から20:00まで基礎看護学実習室を開放し、教員が指導につきながら個別にアドバイスをしている。学生は実習室の管理を自ら行い、計画的に学習に取り組むことが求められる。

最初に学ぶ技術はベッドメイキングで、教員のデモンストレーションを見た後自己練習を重ねるが、思うように技術修得が進まないことがある。教員を活用して練習するように促すが、学生自ら教員に質問等することなく練習が進んでいく。そこで、教員から学生に声をかけ、他者と学ぶ重要性を伝え、困難点や成長した点をフィードバックしている。

## Ⅲ 事例

### 1. 看護学生に必要な身だしなみを整える

#### ①教員の説明に納得がいかない学生A

教員：つけまつ毛やまつ毛エクステーションは、無菌操作時に落ちてしまう可能性があるた

めつけてはいけません。年代が違う人から見れば不自然で不真面目、清潔感がないと思われるかもしれません。

学生A：まつ毛はそんな簡単に落ちへんし。先生は、エクステがいくらしてると思ってるんやろ…。わかってないわ。

教員：エクステーションのこと、よく分からないわ。Aさん、一度詳しい内容を教えてもらえないかな。

この事例では、学生が教員の説明に納得できず、身だしなみを整えることに抵抗感を持っていた。その根底に、“先生は、自分たちのことを何もわかってない”という思いがあると理解した。そこで、学生のことを知りたいというメッセージを送り、学生からまつ毛エクステーションの方法、施術価格(相場7,000円)や持続期間(3週間)の講義を受けた。その結果、つけまつ毛禁止の理由を「手術中など重要な操作をしている時につけまつ毛を患者の体内に落とす可能性も否定できない」と変更し、学生がエクステーション施術サイクルを検討できる時期にアナウンスした。一方学生も、患者に迷惑をかけるのはいけないという思いから、実習にタイミングを合わせて身だしなみを考えるようになった。

#### ②禁止だとわかっているのにつけまつ毛をする学生B

教員：つけまつ毛は実習中禁止と伝えたのに、今日はつけているんだね。何かあったのかな。

学生B：いつも長いまつ毛でかわいくみえるように勝負しているのに。かわいくなかったら、患者さんに嫌われるかもしれない…。

教員：患者さんは、学生が一生懸命学ぶ姿勢を見て、“信頼できる子だな”と思うんだよ。自然なまつ毛の方が、表情も伝わりやすいし、患者さんは受け入れてくださると思うよ。

この事例では、つけまつ毛は禁止とわかっているのにやめられない様子が見ええた。話を聞く中で、“かわいくみえないこと”で患者から拒否されるという学生の心配があったことが理解できた。そこで、自然な化粧は表情が伝わりやすく、患者は安心することを伝えた。また、目標とした身だしなみが整えられた際には、教員は「今日は身だしなみが整っていて、かわいく見えるよ」と認めることで、学生のかわいくいたい気持ちに応答するようにした。その後、学生は、教員から注意されなくても適切に身だしなみを整える

ようになった。

## 2. 基礎看護技術修得に必要な姿勢を学ぶ

まじめに自己練習をしているのに看護技術が上達しない学生C

教 員：何か質問ある人いますか。

学 生：…。

教 員：Cさん、毎日練習に来て頑張ってるね。すごいね。

学生C：先生、何回やってもうまくならないんです。

教 員：なんでやろうね。どこがうまくいかないかな。

学生C：…。

教 員：1回やっているのを見せてもらっていいかな。

学生C：はい（ベッドメイキングをする）

教 員：ほんとだね。しわがいっぱいになるね。今日は下シーツだけうまく敷けるようになって帰ろう。

～数日後～

学生C：先生、この前教えてもらったところをもう1回見て下さい。

教 員：少しは何か掴めることがあったかな。

学生C：はい（ベッドメイキングする）。

教 員：前より上手くなっている。すごいね。何が変わったのか言葉で説明できるかな。

学生C：シーツをしっかりと握ること、視線は前を見て、腰を落すことで、シーツが前腕に引っかからなくなったんです。

教 員：何を考えて実施したか伝わったよ。できる

兵庫医療大学看護学部 基盤看護学作成  
2011年度改訂版

### 表1 身だしなみチェック表

患者さんやご家族から見て好感のもてる身だしなみを心がけましょう。身だしなみであなたの第一印象が決まります。ユニフォームを着用したら必ずこの“チェック表”を使って実習前にあなたの身だしなみを確認しましょう。

#### 【髪】

- ☐ 清潔感のある髪型にしている
- ☐ 肩に付く長さの髪の毛は束ねてアップにしている
- ☐ 髪の毛はおじぎをした時に前に垂れてこない
- ☐ 髪の毛の色は派手な色でない（JHCAレベルスケール5を上限とする）
- ☐ 髪の毛の留め具は、ゴム、ピン、ネット、クリップとし、黒または茶色で光らないものを使用している

#### 【化粧】

- ☐ マスカラや付けまつげを控えた自然で健康的なメイクである
- ☐ ひげを剃っている
- ☐ 香りの強い香水・化粧品・整髪料は使用していない

#### 【爪】

- ☐ 手のひら側から見えない程度に短く切りそろえている
- ☐ マニキュア・ペディキュアは取り除いている

#### 【アクセサリ】

- ☐ アクセサリは取り外している
- ☐ ピアスはつけない（演習：透明ピアス可，実習：透明ピアス不可）
- ☐ コンタクトレンズは無色・透明である

#### 【ユニフォーム】

- ☐ 清潔でしわ、ほころび、しみ、汚れのないユニフォームを着用している
- ☐ 自分に合ったサイズのユニフォームを着用している
- ☐ ワンピース型のユニフォームは、肌色のストッキングを履いている
- ☐ パンツ型のユニフォームは、肌色のストッキングまたは白色ソックス（ラインやワンポイントは不可）を履いている
- ☐ 胸ポケットには物をいれない、またポケットには物を入れすぎない
- ☐ カーディガンは白・薄い色の無地とし、フードや飾りが付いていないものを着用している
- ☐ ユニフォームの襟元や袖からアンダーシャツが見えていない
- ☐ 下着は透けないものを着用している（特に柄物は注意する）
- ☐ 清潔な靴を履いている

ようになってうれしいね。患者さんがこのベッドに寝たら、なんておっしゃるだろうね。

この事例では、ベッドメイキングの自己練習において、うまくできないことを表明しないまま、教員に指導を受けず黙々と一人で練習をしている様子があった。教員から声をかけ、下シーツをしわなく敷くという達成可能でわかりやすい目標を設定することにより、停滞していた学習が進み始めた。その後は、学生は自ら進んで質問し、できないことを表明し、改善点を見出し、練習を重ねるようになった。教員は、成長を共に喜び、今後出会う患者という存在を意識できるコメントを付け加えた。

#### Ⅳ 考察

1年生の主体性を育むために重要なこととして、謙虚に問いかける、学生が生きている世界を知る、他者を意識させるの3点を挙げる。

学生Aの事例のような決まりを厳守しなければならない状況において、教員は学生の守れないことに着目し叱咤してしまう。しかし、守れない学生の思いに目を向けた時、学生の身だしなみを整えたい気持ちや患者に向き合いたい気持ちに触れることになる。また学生Cの事例のように、自分のできないことを表明することは、評価が気になる自信のない学生にとっては困難を伴うであろう。E.H.シャイン<sup>3)</sup>は、上司・部下や教える・教えられるという上下の関係性において必要な問いかける態度・技術として、“謙虚に問いかける”重要性を指摘した。問いかけはそもそも「相手に対して興味や好奇心を抱くという態度から導かれる」<sup>3)</sup>とし、上下の関係における謙虚さは、強い立場の者が「自分よりも地位が低いメンバーに“自分は実質的に頼っている”という事実を認識することを示す」<sup>3)</sup>と述べている。教員の期待・価値・先入観を挟まずに、学生に興味と関心を示し問いかけることにより、学生は心を許し本音を話すのではないだろうか。身だしなみにおける謙虚な問いかけは、身だしなみが強制ではなく、整えるかどうかは学生の意志に頼っているということを伝え、責任をもたせることになる。また、自信のない学生には、あなたの現状を知りたいので、自分のことをよく知っている“あなた”が話してほしいとメッセージを送ることにより、主体が自分であることを意識できるように働きかけた。今回の振り返りを通して、主体性の重要部分である“自ら考える”ことを、学生は日々無意識的にも意識的にも行っていることが

わかった。学生は考えていないわけではなく、考えを表出していない可能性もあるため、表出することができると教育関わりを実践していくことが求められる。

また、謙虚な問いかけの実践により、「教員は何もわかってない」や「かわいい」の言葉に含まれる学生の思いを知ることになった。学生は教員が知らない世界を多く持っており、教員の説明がその世界に合致していないことも考えられる。学生Cの事例では、学生が技術修得について困っていることを、学生の言葉と教員の目で確認し、学生の今いる世界（現状）を捉え共有した。そのことが、学生にあった個別で達成可能な目標の提示につながり、学生は目標に向けて進んで努力を重ね到達することができた。人間は、適度に難しい目標を持つと、懸命に努力し達成を目指すといわれている<sup>4)</sup>。シラバスや講義中に提示する学習目標が学生にとって理解できるものであるか、挑戦したいと思う目標であるか、再度査定することが大切である。加えて、学生が生きている世界と一緒に体験することで、教育に必要なわかり合える関係を築くことができると考える。

最後に、いずれの事例も学生の実施した内容に対して、患者の視点を取り入れフィードバックを行った。自分にとってどのような意味があり結果をもたらしたのかを考えると同時に、他者にとってどのような意味があったのかを考えられるように意図したものである。看護は対象者と関係性を築き、相互に影響し合いながら実践するため、“他者”の存在を意識することなしに成立しない。またチーム医療においては、多職種を知らずして協働は不可能で、チームメンバーの役割や機能を熟知しておく必要がある。看護者が主体性を発揮したその先には、いつも看護の対象や協働者が存在する。鯨岡<sup>5)</sup>は、主体性には自分の気持ちや想いに重きを置き、意思を貫きたいとする自己充実主体性と、相手の気持ちや思いに関心を向け相手を信頼し寄り添いたいとする整合希求主体性の2種類が存在すると指摘している。学生Bの事例では、患者という他者を意識するがゆえに“かわいくいること”にこだわっている姿があった。そのこだわりは幼いものではあるが、他者へのまなざしが存在していることは注目すべき点である。看護者は、自己充実主体性と整合希求主体性を持ってこそ、真にプロフェッショナルとして他者をケアすることができると考える。



## V おわりに

2015年度全学FD/SDにおいて「主体性を育むには」というテーマで、1年生とのやり取りを内省し意味づけた。その中で、学生は主体性を持っており、どのように発揮するかという点で教員のサポートを必要としていると感じた。今後は、学年進行とともに成長する学生との関わりについて振り返り、主体性を育むために必要な教員の教育能力を明確化し、研鑽していきたいと考える。

## 引用文献

- 1) 松村明編. 大辞林. 第三版. 三省堂. 2006, 2976p.
- 2) 中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて(答申)”. 文部科学省. 2008-12-24. [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) (参照2016-7-10).
- 3) エドガー・H・シャイン. 問いかける技術. 金井壽宏監訳, 原賀真紀子訳. 英治出版株式会社, 2014, 237p.
- 4) 松尾睦. 職場が生きる人が育つ「経験学習」入門. ダイアモンド社, 2011, 224p.
- 5) 鯨岡峻. 人はみな、育てられて育つ. 家族看護学研究. 2008, 13(3), 177-184.

